論　説

「実践と研究をつなぐ」を生きる

――授業・実践・研究に即して――

岩手大学
吉田章宏

「実践と研究をつなぐ」を生きる　「実践と研究をつなぐ」という主題の設定に注意をひかれました。すると、一つの疑問が湧いて来ました。「実践と研究をつなぐ」ということが深刻な悩みとなり心の底からの真剣な問いとなるのは、一体どのような状況なのだろうか、と。そこから生まれた想像の……いや、空想・幻想・妄想の、かも知れません……流れに身を任せて泳いでみました。

「実践」も「研究」も、言葉としては、名詞です。そこで、「わたくしの、あなたの、かれ／かのじょの『実践』」とか、「・・・の『研究』」とか言えます。では、ここでの主題は、誰の「実践」と誰の「研究」を「つなぐ」ことでしょうか。また、「つなぐ」は動詞です。「わたくしが、あなたが、かれ／かのじょが『つなぐ』」と言えます。では、「つなぐ」のは誰でしょうか。誰の「実践」か、誰の「研究」か、と問う以前に、誰かが「実践する」とか誰かが「研究する」という出来事があったはずです。その出来事の結果生まれたのが、誰かの「実践」であり誰かの「研究」なのでしょう。いや、誰かが「実践する」とか「研究する」という活動や過程そのものが、誰かの「実践」とか「研究」なのかも知れません。こうして、「誰」ということが鮮明に浮かび上がってくるのは、動詞で主題化した場合であることに気づきます。「誰が」ということに着目すると、「実践と研究をつなぐ」には、論理的には、3×3×3＝27通りの場合を区別して考えることができます。つまり、「わたくしが実践し、研究し、つなぐ」場合から、「わたくしが実践し、あなたが研究し、かれ／かのじょが

つなぐ」場合などを経て、「かれ／かのじょが実践し、研究し、つなぐ」場合に至る27通りです。「実践と研究をつなぐ」を具体的に考えるには、少なくともこれら27通り総ての場合について考えなくてはならないでしょう。

誰の「生と死」か、誰が「生きる」か誰が「死ぬ」か

以上のようなことを考えたのは、実は、「生と死」について考える場合には、「誰」ということが大問題になるということを思い出したからなのです。「わたくしの生」、「あなたの生」、「かれ／かのじょの生」、どれも「生」としては、少しも変わりがないかのようにも思われます。では、「死」についてはどうでしょうか。「わたしが死ぬ」、「あなたが死ぬ」、「かれ／かのじょが死ぬ」。途端に、たいへんな差異が浮かび上がってきます。「わたしが死ぬ」（第一人称態の死）のは、「あなたが死ぬ」（第二人称態の死）や「かれ／かのじょが死ぬ」（第三人称態の死）のとは、私にとっては、……この「私にとっては」という点が肝心なのですが……雲泥の差というより、天と地ほどの差です。「わたくしが死ぬ」と、私にとっての世界全体が消え去るからです。このことの詳細は、ジャンケレヴィッチの『死』（みすず書房）に豊かに展開されています。

「どれも『生』としては、少しも変わりがない」と述べました。しかし、「誰の死か?」で、「死」と「死ぬ」にこれ程の差異を生じることの発見で、「生」と「生きる」にも同様の差異が存在することが発見されます。そして、いわば「生きる」を構成する要素としての「実践する」、「研究する」、「つなぐ」にも、同様の差異が存在することも発見されます。「実践と研究をつなぐ」のは誰か、ということが肝心な問題となるのです。

授業実践者・武田常夫は、「授業者は、授業をすることによってしか授業の機微を知ることなどできない」（『真の授業者をめざして』国土社、一九九〇年、二六ページ）と書き遺していました。「授業の機微」を知るにおける、「実践する」ことの、掛け替えのない重要性を述べたもの、と読むことができましょう。では、「研究する」については、どうでしょうか。「研究する」は、誰がやっても変わらない、機械的単純作業なのでしょうか。また、「つなぐ」はどうでしょうか。「研究」も「つなぐ」も、「実践」と同じように、「誰の」・「誰が」によって差異が生まれる個性的な仕事です。そして、それは、生死と同じく、「私にとって」は大きな差異を生ずるのです。

「わたくしが実践し、研究し、つなぐ」場合　「授業の機微」について語った武田常夫にとって、実践の研究は、「つなぐ」ことを改めて考える余地などない程に一体化していたように私は思います。武田にとっては、研究なしの実践も、実践なしの研究も、あり得なかったのです。なぜなら、授業・実践・研究の深まりとは、「教材研『究』」を深め、授業計画を『図』り、授業を自ら『生』き、授業体験を自ら『省』みること、つまり「究―図―生―省」の螺旋階段を、徐々に登って行くことそのものだったからです（稲垣忠彦・柴田義松・吉田章宏『研究の原理2　教師の仕事』東京大学出版会、一九八五年、三二～四四ページ）。実践そのものが研究なのです。「授業の機微」に鈍感な実践者に、「研究する」や「つなぐ」が、どうしてできましょう。優れた実践においては、「つなぐ」ことなど改めて問題とはならない程に、深く豊かな研究が一体となっていて、その実践を支えているのだ、と私は思うのです。

「わたくしが実践し、かれ／かのじょが研究し、わたくしがつなぐ」場合　実践は私がする。だが、「研究」などというものは、私は苦手だ。だから、「私の実践」を、研究者である「かれ／かのじょ」が研究してくれて、私は、その結果を教えて頂こう。それを「私の実践」につなげて生かそう。でも、「つなぐ」には、どうしたらよいのだろう、と悩む実践者が想像されます。「つなぐ」が成功して、実践に生かされる例も稀にはあり得ましょう。しかし、研究者の研究が客観的科学的方法によるアカデミックなもので、実践者の私が汗水ながして苦闘している日々の土臭い実践とはおよそ縁が無いなどと、本音のところで密かに感じている場合、悩みは、深刻になる以前に、いつしか忘れ去られてしまいます。で、私を悩ませるような研究報告など、次第に読まなくなる。これは、よくあることです。

「かれ／かのじょが実践し、わたくしが研究し、わたくしがつなぐ」場合　私は、実践に貢献する研究をするのだ。そう考えて、実践を、大学院などで学んだ最新の科学的客観的方法で研究し、新しい実践研究の創造に情熱と誇りを抱く。実践に貢献するという目標達成には「つなぐ」が今は欠けている。それも私がしなきゃならない。でも、相手のかれ／かのじょは「つなぐ」に関心をもたない。研究の意義が分からないのか、もっと易しく噛み砕いて説明すべきなのか。で、悩む。この悩みは、当の私が真面目であればあるほど深刻です。貢献への道が見えて来ないから

です。結局、私の研究は、趣味や遊びに過ぎないのだろうか。実践研究は学会では容易には認めてもらえない。私はこんなにも苦労しているのに……、ということになります。「つなぐ」が真に可能であるかどうか。その答えを確かに掴むには、認識論・学問論的省察の媒介が必須です。が、実践者と、一夜、澄んだ素直な心で語り明かせば、案外、鮮明に見えてくるのかも知れません。

「かれ／かのじょが実践し、あなたが研究し、わたくしがつなぐ」場合　私には、実践もわかる、そして、研究もわかる、だれも「つなぐ」ことをしようとしない。じゃあ、私がその橋渡し・通訳の役目を果たそうか。私の通訳は、実践者にも研究者にも喜ばれる、それが、私の喜びでもある。だが、実践者の言葉と研究者の言葉は、あまりにも違い過ぎる。通訳の手引きを、構造主義的な一般システム論（ベルタランフィ）に求めたり、人間経験の根底を探る現象学や発生的論理学（フッサール）に求めたり。でも、「つなぐ」は、本当に可能なのだろうか。私自身をわかるために、私だけでなく鏡や言葉や他者が必要なのと同じく、実践をわかるために、実践から一定の距離を保つ研究も必要だろう。しかし、実践を対象とする研究が、実はあくまで「研究のための研究」に過ぎない場合、「つなぐ」はほとんど不可能だと分かることになる場合も有り得るのではないでしょうか。それは、実践の人間的脈絡と研究のそれとの間の差異が大き過ぎるからです。「つなぐ」を目指す努力が徒労に終わる場合もあるのです。そうした事柄について考えるには、東西の医学の差異を巧みに描いている、松下喪『絵本　東の医学・西の医学』川島書店、一九八八年、は参考になるでしょう。自然科学的生理学と人間学的生理学の差異を、学問的に論じた、ボイテンデックの「人間学的生理学への序論」F. J. J. Buytendijk Prolegomena to an Anthropological Physiology. Duquesne UP. 1974. も、ご参考になると思います。

人の一生の時間は限られています。それぞれが、「実践」、「研究」、「つなぐ」の何処に自らの力と時間をどう注いで生きるかを研究して「生きる」ことは、とても大切なことだ、と私は思います。

（教育学部教授・東京大学名誉教授　教育心理学）